

## FREE MAD レクチャー スクリプト

シリーズ名 | 1908-1913 – 機械の時代と現実を映し出す新しいイメージ (6 レクチャー)  
「1908 ドイツ 表現主義、イギリス ヴォーティシズム、そして初期抽象主義」

講師 ロジャー・マクドナルド (AIT / Total Arts Studies プログラム・ディレクター)  
制作 NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]

URL : <https://youtu.be/yRoi6aclzog> (34:14 / YouTube) [2012 年制作]

参考文献 : 『Art Since 1900』 Thames & Hudson (March 30, 2005)

### はじめに

2012 年 1 月、NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト] の設立 10 周年を記念して、これまでに蓄積した知識や経験を多くの人と共有し、混迷する時代においてなおアートが必要であることを広く伝えていきたいとの思いから、それまでに有料だったレクチャー・シリーズ (E-MAD) を、「FREE MAD」に名称を改め、動画の無料公開を始めました。

昨年の 2020 年、動画に字幕をつけてほしいというリクエストを受けたことをきっかけに、すぐに AIT ができることとして、各シリーズを文字に書き起こし、このレクチャー スクリプトを作成しました。

### 「FREE MAD」とは

1900 年から 100 年間のアートの旅をめぐるオンライン レクチャー・シリーズ。ナビゲーターである AIT のロジャー・マクドナルドが、英国で出版された 20 世紀芸術の概説書『1900 年以後の芸術：モダニズム、アンチモダニズム、ポストモダニズム (Art Since 1900)』\*をもとに、テーマごとにアートの歴史を読み解いていきます。

パブロ・ピカソの《アヴィニョンの娘たち》やマルセル・デュシャンの《泉》、また、ロシア構成主義など、世界のアートの歩みに大きな衝撃を与えた 1900 年から 1968 年までの運動や思想、作品、批評を 80 本のレクチャーとして随時公開しています(2021 年現在)。URL : <http://mad.a-i-t.net/category/freemad/>

\*公開当時、概説書は英語のみでしたが、現在では日本語訳も出版されています。  
(概説書 『Art Since 1900 図鑑 1900 年以後の芸術』 2019 年 6 月発売、東京書籍)

\*「MAD」は、AIT が 2001 年から 2019 年まで開講した現代アートの教育プログラム「MAD (Making Art Different=アートを変えよう、違った角度で見てみよう)」の名称です。

\* 本レクチャー内容に関するご質問は受け付けておりません。

### NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト] について

2001 年、現代アートに興味がある誰もが学び、対話し、思考するプラットフォームづくりを目指して、6 名のキュレーターとアート・マネジャーが立ち上げた非営利団体です (2002 年法人化)。個人や企業、財団あるいは行政と連携しながら、現代アートの複雑さや多様さ、驚きや楽しみを伝え、それらの背景にある文化について話し合う場を、さまざまなプログラムをとおして創り出しています。AIT は、芸術を、より複雑で感覚的で、これからの時代を生きぬく想像力を養う「道具」として捉え、芸術が果たしうる役割と未来について考え、行動を起こしていきます。 URL : <http://www.a-i-t.net/>

本資料は、FREE MAD 動画レクチャーを書き起こした著作物につき、個人使用目的以外の無断転載、複製、改変、再配布はご遠慮ください。  
作成 NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]

こんにちは、皆さん。今日は、Art Since 1900 の 1908 年です。キーワードとしては、ドイツ表現主義という運動が出てきます。締めにはイギリスのヴォーティシズムという運動も出てきます。それを結ぶテーマは、抽象ということです。抽象とは何かという質問に答えていこうとするチャプターだと思います。キーになるのは、サブタイトルにも出てくるウィルヘルム・ヴォリンガーです。ヴォリンガーというドイツ人の美術史学者があるエッセーを書きます。それが一つの軸になって、このチャプターが書かれています。

85 ページから読んでいきます。

出だしは第 1 次世界大戦で戦死しますが、ドイツ表現主義のフランツ・マルクというアーティストが、戦場から手紙の中で出したある疑問からです。抜粋すると、われわれ近代の画家たちが抽象に向かう意思と、何千年前に生きた原始人たちの抽象への意思は、意外に対応しているのではないかということです。コレスポンデンスというキーワードが出てきます。そういう疑問が出てきます。マルクは実際に文化人類学博物館などで、トライバル、プリミティブな芸術も見ていました。1908 年にウィルヘルム・ヴォリンガーが書いた論文に、この質問が反映されます。

セカンドパラグラフです。ヴォリンガーは実はドイツ表現主義をいろいろな場所で擁護していたこともあって、その芸術方法に興味を持っていました。

セカンドパラグラフの上から 7、8 行に行きます。

“For example, in a 1910 foreword to *Abstraction and Empathy*, he noted only a ‘parallelism’ with ‘the new goals of expression’.”

彼が 1910 年に新たに書く『*Abstraction and Empathy*』という本ですが、日本語では、「抽象と感情移入（共感）」ということになるのでしょうか。そこで、まさにドイツ表現主義と何らかの並列関係があるのではないかということを書きます。

“This parallelism did point to an ‘inner necessity’ in the age”

時代の中での内側の必要性ということです。そして、必要性は、ブラウエライター（ドイツ語：BLAUE REITER / 和訳：青騎士）というドイツのアーティストグループと非常に近いものであったということです。このブラウエライターと

いうグループは、非常に「精神の目覚め」、「スピリチュアル・アウェイクニング」という言葉をよく使います。

“This was most evident in the Blaue Reiter Almanach that Marc and Kandinsky published in 1912”

「精神の目覚め」が抽象に関係するということが、フランツ・マルクとワシリー・カンディンスキーたちのブラウエライター（青騎士）というグループが1912年から出してきた、『ALMA NACH』という一つの年鑑にあります。

そして、85 ページの右コラムです。  
このような形而上的な美術に対するアプローチがあります。「Die Brücke / 橋」は、ドイツ表現主義の一つのグループの名前です。エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナーが、ドレスデンで1905年に立ち上げた表現主義のグループです。他のメンバーの名前も85ページの右下に出ています。  
この形而上的なメタフィジカルなアプローチは、ドイツ表現主義の中では多いということです。

86 ページに進みます。  
反対のスタイルについての話です。ヴォリンガーの『Abstraction and Empathy / 抽象と共感』という論文についての言及は、なかなか興味深いと思います。ヴォリンガーは、二つの大きな概念をこの論文で示しています。

86 ページの左コラムの下辺りになります。「共感と芸術的な意思」というものが、彼が出す概念です。それは違う芸術のスタイルに当てはまり、さらにその後ろにある、違う心理的な状況を彼は言及しようとしています。

“Across history and culture, Worringer argues, two opposed styles——naturalistic representation and geometric abstraction——have expressed two opposed attitudes——”

この辺りも面白いと思います。ヴォリンガーいわく、歴史や文化を横断して、二つの対立関係を持ったスタイルというものがあるということです。自然主義的な具象表象、もう一方は幾何学的抽象という、相反するスタイルがあります。このスタイルは正反対の態度を描いているとあります。一つが世界との共

感的関係、もう一つが衝撃的な世界からの撤退ということです。さらに、深く言及していきます。

“Happy pantheistic relationship of confidence between man and the phenomena of the external world,”

汎神論的で愉快的な、人間と外界との事象を持った関係性が、共感の下にある態度です。

そして、86 ページの右コラムの上です。

“the urge to abstraction is the outcome of a great inner unrest in man by the phenomena of the outside world...We might describe this state as an immense spiritual dread of space.”

抽象への意思は、大きな内部不安であり、これは外の世界が起こす不安ということです。この不安は、ヴォリンガーいわく、空間に対する精神的な恐怖感ということです。そこから4行ほど下に行きます。

“According to Worringer, primitive man sees nature as a hostile chaos:”

ヴォリンガーいわく、原始人たちは自然を敵対的なカオスとして見ていたということです。逆に、非常に静けさの必要性を非常に強く望んでいたといえます。

“Immense need for tranquility,”

だからこそ、プリミティブなアーティストは外観からの避難として、抽象に向くという、これが Abstraction and Empathy でのヴォリンガー論です。

近代芸術家との関係がさらに述べられます。5、6行目、下に行きます。

“As a consequence, according to Worringer, the modern artist also struggles to arrest and separate the flux of phenomena, to abstract and preserve the stability of forms: driven once more by ‘inner unrest’ and ‘spatial dread’, he too turns to abstraction,”

近代のアーティストたちも、実は抽象に最終的に向かいます。その理由は、トライバルなアーティストと非常に近く、内部不安、空間的な恐怖があるからです。そして、外観的な現象を分類しなければならないので、安定化して、保存することができるようにするために抽象に向かうということです。ヴォリンガー論のこの辺りは、なかなか興味深いと思います。

86 ページの右コラム下で、ブラウエライターのマルクとカンディンスキーの作品は、果たしてヴォリンガー論に一致するのかどうかという質問を出しています。Die Brücke というグループにヴォリンガー論は当てはまるのではないかということが言及されています。

そして、87 ページの左上から 5、6 行目です。

“Just as, according to Worringer, the natural world appeared chaotic to primitives, so, too, according to Kirchner, did the urban world appear chaotic to moderns”

Die Brücke のリーディングアーティストのキルヒナーが出てきます。ヴォリンガー論の中で自然界はカオスの領域に見えたと同時に、キルヒナーには都市空間は近代人にとってのカオスであったということです。かぎかつこの中では、ドイツでは産業革命も非常に進んでいる時代だとあります。

そして、ここでキルヒナーの 1908 年の《The Street》。ドレスデンを描いています。ドレスデンを生命感にあふれた町、さらに、神経がぶつかり合う近代都市の独特の空間として描いています。非常に不思議な作品です。特に絵の中央の少し奥に立っている女性の右手が、ビッグフットのように長いです。サルのように長くて、不気味な感じもすると思います。

その下で、ゲオルク・シメルという社会学者についても、言及があります。シメルは 1903 年に有名な論文を書いています。近代都市の神経のぶつかり合いについて、いち早く言及しています。近代都市論について、ヴァルター・ベンヤミンと並ぶぐらい、重要な分析をいち早く行っています。

そして、87 ページの左コラム、セカンドパラグラフに進みます。

“For Worringer, abstraction served to ease the stimulation provoked by the chaos of the world.”

ヴォリンガー論に対しての言及があります。抽象とは外観的な世界のカオスを和らげる意味をもって存在していました。

“Kirchner, on the other hand, approached abstraction in order to register this stimulation, indeed to heighten it.”

一方で Die Brücke のキルヒナーは、刺激を読み取るために抽象を選び、さらに近代都市の刺激を高めるために抽象という方法を追求します。

“The abstraction of the Blaue Reiter is different again:”

ブラウエライターのグループの抽象は、さらに違う質があるということです。

“Marc moved toward abstraction in pursuit of a connection with the natural world, while Kandinsky did so in search of a communion with the spiritual realm.”

フランツ・マルクの抽象の発展は、自然界との何らかのコネクションを求めて、発展するものです。一方、カンディンスキーは、精神世界との交信を求めて、抽象に行くというものです。両方のアーティストは、人間の孤独さというものを乗り越えるために、抽象化を追求しているということです。

そこから、また2、3行下です。

“Rather than abstraction versus empathy,”

これがヴォリンガー論です。ブラウエライターの美学は、共感対抽象ではなく、共感としての抽象というものだということです。自然界との共感、もしくはカンディンスキーの場合は、精神世界との共感です。こういう解釈です。

そして、その下です。ブラウエライターの主要メンバーのカンディンスキーについてあります。一番下の行です。

“Kandinsky insisted that the very ‘contents’ of his art are “what the

spectator lives or feels while under the effect of the form and color combinations of the picture.”

カンディンスキー自身も、彼の絵を見る人が、絵のフォルムや色彩のコンビネーションの影響を感じるということを言っています。絵のエフェクトという言葉を使っています。これが彼にとって、芸術の一つの可能性だということです。まさに絵は、見る側の心を動かすなど、影響を及ぼすことがあります。

“And this is one reason why they took music, which featured prominently in the Almanach, as an aesthetic paragon.”

これも少し別の問題ですが、実はブラウエライターのアーティストたちは、音楽を非常に尊敬していました。美学的な模範として、音楽というものを考えていたそうです。芸術が直接的な影響を及ぼすということが、カンディンスキー、マルク、ブラウエライターにとって重要でした。

87 ページの右のコラムです。汎神論的浸透、汎神論はアニミズムという言葉を使ってもいいと思います。

カンディンスキーが、超越的な精神世界を目指しているとしたら・・・

“Marc delved into the immanent world of nature.”

フランツ・マルクは内在的な自然界に没入しようとしていたとあります。この上のパラグラフですけれども、ゴーギャンの影響を受けたマルクは1910年の段階で、自分の芸術プロジェクトが・・・

“a pantheistic penetration into the pulsating flow of blood in nature, in trees, in animals, in the atmosphere.”

自然の地で、木や動物、雰囲気にも汎神論的に浸透していくものだと言及しています。これを行うために、マルクは二つのタイプのドローイングを制作します。一つのタイプは、有機的なものです。マティスやカンディンスキーの影響を受けた、線をフィーチャーしたドローイングです。もう一つのタイプは、幾何学的、不安なラインです。ピカソやロバート・デローネの影響を受けた、不安なドローイングの線です。そして、マルクはさらに色彩の象徴システムもオリジナルで考えます。

カンディンスキーのように、見る側に影響する独特な色彩も考えます。青は激しくてスピリチュアル、黄色はやわらかい、センシユアルといったようなことです。

マルクは皆さんがご存じのように、西洋の絵画伝統の中では、動物絵画の第1人者的なアーティストとして素晴らしい作品を残したということが書いてあります。残念ながら、第1次世界大戦で戦死しました。

次の88ページです。

マルクの汎神論的な自然界との共感についてです。マルクの抽象を通じての共感、ある意味では自己と他者を、絵を通じて、何らかの形で解決しようとしたということも言及されています。

88 ページ左上のパラグラフです。これは理想としても難しいものでした。1913年の《The Fate of the Animals》という作品を見ると、まさに汎神論的な浸透というものが見えるのではないかとことです。しかし、人間と動物の共有点が何かというと、苦しみ、もしくは苦悩ではないかということが言及されています。描かれている木さえ切られているという感じです。マルクの自然に対する共感という裏には、ナチュラルサファリ、苦悩が繰り返し行われる領域だということもあります。

コラムの下から4行目にマルクの作品の言及があります。

“His work points to the ultimate separation between beings.”

マルクは、全生物が究極に分離されているということがあるとしています。マルクの絵の中で、動物は圧倒的な他者、非人間的な存在、共感の向こう側の存在として描かれています。マルクの場合は、ここでは機能できなくなって、抽象という限界に至るということです。

最後のセクション、非人間性についてです。これは「ヴォーティシズム」というイギリスの前衛運動の中でも重要な運動ですが、あまり美術史の中では聞きません。リーダーはウインダム・ルイスです。ペインターであり、ノベリスト、そして批評家です。他にジェイコブ・エプスタイン、ゴードイエ＝ブジュスカ、デイヴィッド・ボンバーグ、イギリスで活躍した前衛画家たちがこのヴォーティシズム運動に参加します。



最後に、このヴォーティシズムが非人間性の形で共感、そして抽象という概念を全く違う形で読み直します。

89 ページのコラムの上から 5 行目ぐらいです。

“Steely antihumanism, emergent in Vorticist art,”

鉄のようなアンチヒューマニズムが、ヴォーティシズムの美術で見ることができるといことです。

“That valued ‘a feeling of separation in the face of outside nature’.”

自然界に対して、分離の気持ちが最も重要であったということです。

上を飛ばして、その下のパラグラフ、ウインダム・ルイスの作品の言及があります。

“Lewis saw dehumanization as a solution as much as a problem:”

時代的にはドイツ表現主義と同じ、イギリスも産業革命で、時代的には近代都市空間が非常に発達しています。非人間性は、ルイスにとって問題でもあり、しかも何らかの答えでもありました。非常にポジティブな面も実は持っていました。ここは非常に面白いと思います。

“If the modern age is to survive its own dehumanization, it must dehumanize further; it must take “ strangeness, and surprise, and primitive detachment” to the limit.”

これはなかなか、現代にも共通する一つの考え方です。なかなか面白いです。もし近代の時代が非人間性をサバイバルするのであれば、さらに非人間的な方面に向かうべきであるとしています。もっと非人間性を強調するべきであると言っています。不思議さ、驚き、撤退を限界まで追求するべきであるとしています。これは非常に面白いと思いました。

もう一度、人間性を取り戻すという概念ではなく、ルイスとヴォーティシストたちは逆に、もっと徹底的に限界まで行くしかないと考えました。今、こういう考え方も実はあるのではないかと思います。

そして、その下でルイスのドロワーイングが言及されます。《The Enemy of the Stars》、1913年の作品です。ルイスが絵を描くときには、非常に固めていきます。

“Simple black human bullet.”

まるで黒い人間の玉のようなものになります。そして、《The Enemy of the Stars》というタイトルもいいですね。宇宙空間、自然界の最も象徴として星を捉えるのであれば、《星の敵》というタイトルになります。ここでは、鎧のようなものに覆われて、頭はレシーバーのような形になっています。固い、守り体制に入っているような図をウインダム・ルースは描いています。

そして、一番下から4行目です。

“In either case, this ‘enemy of the stars’ is the opposite of the Blue Rider whom Kandinsky evokes on an ascent toward the heavens.”

ヴォーティシストのルイスが描く図は、ブラウエライターもしくはカンディンスキーが考えていた図と正反対のパターンだとあります。カンディンスキーのようなキリスト教徒の言語で言うと、「アセンション」、上昇点に向かっていく精神の開放という考え方と正反対です。ルイスは固まる、鎧をかぶる、さらに非人間性を追求する、物質化すると言ってもいいと思います。カンディンスキーは空氣的で、上昇する、軽くなるというイメージも出てきます。

締めです。

“Lewis suggests an abstraction of the figure that is indeed anti-empathic.”

最終的にルイスのフィギュアの抽象の表現は、まさに反共感的であるという締めでした。

皆さん、どうでしたか。ブラウエライター、Die Brücke、そしてヴォーティシズムが出てきました。このウィルヘルム・ヴォリンガーの「Abstraction and Empathy」という一つの理論を基にして、当時の前衛アーティストたちが抽象というものをどのように考えていたかという話だったと思います。

今日はこの辺りで終わります。